

エッセイ

「専門官の時代」のことなど

光田 和伸

退任まで残り百日と少し、そろそろ研究室を片付けなくてはと思います。始めた昨年一二月に、体調に次第に違和を覚えて、一六日に思い切って京都大学病院を受診した。気分だけは常のとおりで、バスと電車を乗り継いで行き、薬を貰って帰ってくるはずが、診察医のことばは「即刻、入院してください。命の危険があります。」だった。そのまま入院し、今日でまるまる二月になる。

この病棟には、御用納めの二日前の二六日に、新築オープン移転で移ってきた。白く明るく、ゆったりとしていて、常時、気温二三度（各自の好みで変更できる）、湿度三〇％に設定されている。窓のむこうに確かに冬至過ぎの日は輝き、木枯らしの鋭い音は聞いたのだが、この冬は冬を知らなかった。そして、ふしぎに頭が澄んでゆく思いがする。

日文研への着任は一九九五年の四月だが、その八年前の八七年八月に第一号の共同研究「日本文学の『私』（翌八八年度四月に発足予定の中西進班）への参加を請われて以来のご縁だから、足掛け三〇年になる。私よりも古い方はもう井上章一さんだけである。

そのころの日文研にはまだ自前の建物がなく、洛西ニュータウン地区のセンタービル三階フロアを借り切り、そこを細かく仕切って、事務室と形ばかりの研究室が並んでいた。共同研究会は隣のエミナース（ホテル）の会議スペースを借りた。共同研究会の四年間に、昭和から平成となり、御陵大枝山町の建設用地が決まり、そしてバブルが崩壊し……という日々でもあった。日文研の建設用地の周囲はまるっきり売れ残って造成もされず、ゆるやかで広大な斜面のまま草が繁り、雲雀が囀り、雉が鳴くというありさまであった。

着任して翌年の一九九六年四月、資料課に専門官というポストが新設され西川慈子さんが京都大学附属図書館から転任して来られた。また、九九年四月には情報課にもできて、隈元榮子さんが京都大学大型計算機センターから着任された。どちらも、たまたま（ではなかったと今では推測しているが）女性であり、課長に准じるポストということで、ご挨拶にうかがうと、事務室の一番奥に、課長と専門官の机が二つ、横並びにならんでいた。内裏雛のようであった。この二人の方の働きは目ざましかった。日文研の今後に必要なことを即断し主導し、てきぱきと手配した。予算も潤沢な時代だった。私が委員長としてお手伝いした事だけでも「宗田文庫」の受入れに伴う整理分類（資料課）、「連歌俳諧データベース」（勢田勝郭さんからの寄贈申し出の仲介と受入れ。情報課）がある。どちらのポストも任期五年で終了し、お二人は京都大学へ帰ってゆかれた。交替の新任者は無かった。日文研の創設期を振り返るとき、この二人の方の果たした役割はまことに大きかったと私は思う。西川さんはいまもお元気であるが、隈元さんは二〇一二年に逝去された。

常に判断し、たえず促進するひとが居なければ組織は動かない。「宗田文庫」の受入れに伴う整理分類にめどがついたころ、私は「古今東西・日本お天気データベース」（仮称）の受入

れを提案した。これは、三重県在住の方が、奈良時代の日本書紀から江戸時代末の日本各地の庶民の日記、随筆までを渉猟して、その天候の記載を集成したもので、データ化したうえで年月日別と地域、都市別の両面からアクセスできるソフトを開発すれば至便だと思ったのだが、予算の関係という理由で後まわしになり、そのまま沙汰止みになった。残念であった。また、私がこの「専門官の時代」に事務室から許可を得て日文研のあちこちに植えていた草花の写真は、花が咲くたびに情報課の職員の方が撮影して記録し、二五〇〇点に達したと聞いた。貴重な種類の花も多く、フリーソフトとして公開すれば意義はあると思うのだが、情報課のハードディスクのどこかに、今も眠っているものであろうか。

（国際日本文化研究センター准教授）